

〔翻訳〕

ジョン・ヘンリー・ニューマン 「知識と職業的技能」

田 中 秀 人 訳

1

前二回の「講演」で私は、第一に一つの目的でもあり、それ自体のために追求して然るべき知性の練磨について、そして次に、その知性の練磨の本質、あるいはそのような知性の練磨のありかを主張してまいりました。いかなる種類のものであれ、真理こそ知性の本来の対象です。ですから、知性の練磨とは、知性が真理を感知し凝視できるようにしてやることにあります。ところで、知性は、現在置かれている状況では、ここで詳しく申し上げるまでもない幾つかの例外を除いて、真理を直観力ヴィジョンによって、あるいは全体として識別するということをしません。私たちは直接的かつ簡潔なる直観力によって一瞥のもとに知るのではなく、いわば少しずつ積み重ねていくことによって、精神的な手順を経て、対象のまわりを巡ることによって、多くの局所的な概念を比較結合し、相互に修正し合い、絶えず適合させることによって、精神の諸々の機能や運動能力を働かせ集中し共同作業させることによって知るのです。このような知性の持つ諸力の結合・協調、拡大・発展及び包括性は、必然的に訓練の問題たらざるを得ません。そしてまた、このような訓練は習慣ルールの問題でして、精神を真理へと導くのは、いかに立派で模範的であろうとも、単なる勤勉さではありませんし、多くの書物を読むことでも、多くの科目を履修することでも、多くの実験に立ち会うことでも、多くの講演を聴くことでもありません。これらのことにはみな何かが欠けているのです。たとえこれらのことをすべて為したとしても、依然として知識の入口をうろついているにすぎません。その人は自分が口にしていないことを悟ってはいないでしょうし、直面していることを心眼をもって見てもいないでしょうし、事物をあるがままに把握していません。あるいは少なくとも、すでに自分が習得したものに従って一歩前進する力など全く持っていませんし、また真理と虚偽とを識別し、塊りから真理の粒をふるい分け、事物をその真価にしたがって整理し、(こんな言葉を使ってよろしければ) 観念を築き上げる力というものも持っていません。こうした力は精神を学問的に形成することから来る成果でありまして、それは判断力、明敏さ、賢明さ、叡智、哲学

的な理解力及び知性的な沈着さと落ち着きといった後天的な能力のことで、このような属性は単に知識を習得しただけでは生まれてきません。肉体の眼は、物体を感知するための器官であって、生まれながらに備わっています。一方、真理をその観察の対象とする心の眼は、修練と習慣の成果なのです。

この訓練の過程によって、知性は何か特殊な、偶発的な目的、何か特定の商売とか職業ないし研究や学問のために形成されたり犠牲にされる代わりに、知性それ自体のために、その本来の対象を認知するために、知性そのものを最高度に修養するために修練されるのですが、この知性の訓練過程のことを「人文・^{リベラル}教養教育」と呼ぶのです。到達し得る最高の人文・教養教育を身につけた人、あるいはかくあるべき模範となるような知性を備えている人など一人もいませんが、反面、真の訓練がいかなるものであるかを漠然と感じ取り、少なくともそれに目を向け、何か他のものではなく、そうした訓練の真の目的と成果を卓越性を計る自分の尺度にしない人もまたほとんどおりません。そして、このような訓練に身を委ね、それをかなりの程度自分のものにした人なら数多くいます。ですから、正しい基準を示し、それに則って訓練し、すべての学生たちがその様々に異なる能力に応じて、その基準に向かって前進するのを助けてやること、これが「大学」の務めであると私は考えます。

2

ところで、このことは一部のお偉方がなかなか認めようとしなない点です。彼らはこう主張します。曰く、「教育」は何か特定の限られた目的に限定すべきで、重さとか大きさとか測定可能なはっきりとした成果を収めるべきものでなければならぬ。彼らは人間にもものにもすべてに値段があるかのように、大きな出費をしたら必ずそれに見合うだけの見返りを期待する権利があるのだと主張します。これを指して彼らは「教育」の「有用化」と称しており、「功利性」が彼らの合言葉となっています。この種の根本原則に基づいているからには、彼らがこう問い続けるのはごく自然の成り行きです。曰く、「大学」の出費の見返りとなるものが何かあるのか、また曰く、「人文・教養教育」が、どのように製造を促進し、土地を改良し、市民経済を改善するかを明確に示してくれないとしたら、あるいはまた、もしそれが法律家、技師、外科医を直ちに養成せず、あるいは少なくとも化学、天文学、地質学、磁気学、その他ありとあらゆる種類の科学の発見をもたらすことがなければ、この「人文・教養教育」と呼ばれる品物の市場での真の価値は何なのか。

この問題は案の定、現今激しく議論されており、今回の連続「講演」の「序論」で触れたように、今世紀初頭の十年間に、一方においてかの世評高き『北国評論』誌と、片やオクスフォード大学の〔人文・教養教育〕擁護者たちとの間で展開された論争の主な主題となったのです。かの由緒ある学府〔オクスフォード〕の権威者たちが永年の怠慢から目覚めて、彼らに委ねられた青年の教育計

画に着手するかしないうちに、折々「北のアテネ」と呼ばれていた都市〔エディンバラ〕の科学、文学の代表者たちは、厳肅極まりない論法と才気縦横といった感のある風刺を駆使して、その教育改革がとっている方向と形態とに異議を唱えたのです。「大学」が「功利主義」哲学に基づいて正されない限り、彼らは満足しません。察するに、彼らの考えでは、それはただ宣言しさえすれば信奉されるような哲学なのでした。実際、彼らは学園の権威者たちが抱いていた信条がいかに深く強いかをほとんど知りませんでしたし、そうである以上、彼らが選んだ論戦の場を気ままに散策させてもらえるなどということは望むべくもありませんでした。故に、彼らは「大学」の代表たる、当時高名で絶大な影響力をもっていた二人の人物と立ち向かうことになったのです。この二人は非常に異なった精神の持ち主でしたが、「大学」という絆で結ばれ、「人文・教養教育」の問題全般にわたって抱いていた、明敏かつ遠大な見解においては一致していました。こうして、オクスフォード大学における学問の擁護の立場は、今日に至るまで変わることなく保たれてきたのです。

3

私自身かつてその名の加護のもとで暮らし、現在もその教義に教えられるところの多い、人品卑しからぬ人たちの思い出話を少しさせて下さい。オクスフォードの真ん中に四方を公道で囲まれた小さな地所がありますが、それは五百年余りの間、ある「協会」の所有地であり、その本部でした。ポニファティウス八世やヨハネス二十二世の昔、スコトス、オッカム、ダンテの時代、人間の至上の関心事を滅亡させるべく今もなお燃えさかっている惨めな火をウィクリフやフスが点すより前、不幸なイングランド王エドワード二世は、パノックバーンの戦場から逃げ帰る途中、「聖母マリア」に、もし無事に帰還できたら、彼女のために聖堂を建立するとの誓いをたてたと伝えられています。王の「施物分配吏」の勧めと助けとによって、王はこの聖堂をアルフレッド大王の都市〔オクスフォード〕に建てることに決めました。玄関門の向かい側の「聖母の像」は今日ではその誓いとその成就のしるしとなっています。「王」と「施物分配吏」が死して久しく、見知らぬ人々が二人が建立した堂に出入りし、二人の信条は忘れ去られ、典礼は否認されてきました。しかし、来る日も来る日も、少なくともかつてかの「学寮」の一員であった一人の「カトリック司祭」の手によって、学寮で彼を長年の間育ててくれたこれらカトリックの恩人たちの魂のために、死者のための祈りがいまだにミサ聖祭のなかで捧げられています。堂の昨今の評判に好奇心をそそられてそこを訪れる人は、威厳とか豊かさといったものとはおよそ無縁の一群の建物を目にすれば、おそらく何か失望に似た感情を覚えるのではないのでしょうか。広い中庭、高い天井の広間や寝室、装飾を施された回廊、堂々たる散歩道、木陰の庭園、学生たちの群れ、豊かな収入、輝かしい歴史、これらのものはこの由緒あるカトリックの建物には全く無縁とっていいものでした。要するに、六十年前、誰もがそこに期待したであろうものの姿など見当たらなかったのです。しかし、当時そ

の中ではある精神が働いていて、一見卑しく見えながらも、その寄宿者たちに他のいかなる団体も及ばないことを行なわせ得たのでした。それは取りたてて深遠な才というわけでも、度外れた誇りでもなく、実際稀有な才、誇りとでもいうべきもので、彼らの良心が最良とする方法で、委ねられた責務を全うしようとする誠実な目的でした。というわけで（オクスフォードの諸「学寮」は自選権を有する団体で、各学寮の特別研究員に欠員が生じた場合、常に特別研究員たちが自分たちでその補充を決めていたのですが）、この学寮のメンバーたちは、悪習のためか、それとも長年の規則のためか、このようなことが外部に知られていない時に、特別研究員の地位を開放して、全応募者の競争制にし、そしてその後仲間となるべき人々を選ぶ際には、あらゆる個人的な動機や感情、親類関係、交友関係、恩顧、政治的・地域的利害関係、偏見、派閥間の嫉妬心などすべてを捨て去って、もっぱら公共的、愛国的な立場に立って選出すべきことを決定したのでした。それどころか、彼らは驚くべき独立心をもって、学位試験の新制度によって「大学」が文学的功績に対して授与する優等の一覧表でさえも、選挙人としての自らの判断を拘束すべきではなく、そしてまた、たとえどんな危険を冒し、どんな批判を受け、どんな汚名を着せられようとも、何者であれ、「創設者」の申し子たるべき人物を選ぶことを、良心に省みて、もし（彼らの言い方を用いれば）かの創設者がこの世に生きていたとして、その知性及び徳性においてこの創設者を最も喜ばせそうな、彼が創設した「学寮」に最も名誉をもたらしそう、彼が心に抱いていたと思われる諸目的を最も促進しそうな人物を選出することを決意したのです。そのような人物は間違っても劣悪な「功利主義」の信奉者などにはならないでしょう。したがって、「学寮」の改革が、彼らがより重視した「学園」^{アカデミー}全体の改革と同時に進行していたこともあって、「北」から押し寄せてきた嵐が「大学」を襲った時、彼らの愛する「母校」^{アルマ・マター}が、急先鋒として最初に名乗りを挙げたこの小さな「学寮」の壁の中に最初の防御者たちを見出すことになったのも決して不思議ではなかったのです。防御者たちと申しましたが、この防御者は二人おりまして、そのうちより著名な方が故コプルストン博士です。博士は当時その「学寮」の「特別研究員」で、引き続いて「学寮長」となり、ランダフのプロテスタントの「主教」にられました。彼に負うところ大なるあの「協会」では、彼の才能が授けた栄誉のゆえに、彼が向上させた学問の重要性のゆえに、彼が植えつけた精神の寛大さ、感情の伸びやかさ、心根の優しさのゆえに、彼の名前は今でも生きていますし、これからも永遠に生き続けるでしょう。それは彼の精神や性格のある面に少しも共感を覚えない人でさえも敬愛せずにはいられないものでした。人生の盛りは人によって様々ですが、私が今お話している偉人の晩年は、聞くところによると、多くの人々に慕われる原因となった職務に捧げられましたが、その職務は若かりし頃「北国」の三巨人が結束して立ち向かってきた際、悠々迫らざる勇壮さをもってその攻撃を迎え撃ち、倒した、あの彼一流の活力と鋭敏さを発揮する場を彼に与えなかったということです。論争が進展してきますと、かの文人仲間のうちでも最も科学的で、批判的で、才気走った人たち、プレイフェア教

授、ジェフリー卿、シドニー・スミス師（彼らは皆コプルストン博士同様、今ではこの目に見える世界から去ってしまいました）は、自身が属する「学園」を擁護するために彼らに立ち向かってきた大胆不敵な論敵を粉々に打ち砕き、叩き潰さんと、『エディンバラ評論』に掲載されることになる一篇の論考〔後出、コプルストン博士の『^{パンフレット}論説』の書評〕に全力を傾注していた、と申してもよろしいのではないかと思います。論説〔『オクスフォード大学で進められている研究についてのエディンバラ評論の誹謗に対する返答』を広げて、それを特徴づけている良識、精神、いかにも学者らしい趣味、文体の純正さといった実際の証拠を手にするまでもなく、あのような人たちを相手に激論を戦わせたという一事をもってしても、博士の手腕は十二分に証明されているとってよいでしょう。

この論争中、博士はすでに私が言及したもう一人の高名な著述家デイヴィスン氏の支援を受けましたが、氏は博士と同じ一般原理に立脚しつつも、より論理的、体系的であり、より明確であって、さらに付け加えるならば、思考及び言語両面の迫力、美、完成度においてより優れていました。デイヴィスン氏は存命中はそれほど世間に知られてはいませんでした。が、「オリエル学寮長」よりも多くのものを世に残し、その名も後代の人々に知られるようになりました。この思慮深い人物は、その後「プロテスタント教会」内で起こったカトリシズムへと向かう運動の創始者として、望むと望まざるとにかかわらず、多くの人々から崇敬され敬愛された一人の極めて非凡なる人物が賞賛してやまぬ人であり、その親しい友人でした。この厳肅な哲学的な著述家——私は彼の著作に接するたびにこのような人物が（彼の前にはバトラー博士という前例がありますが）、幼少期の偏見とか独学による誤りといったもののために「カトリック教会」のもとを立ち去ったことを嘆かずにいられません——彼は当時大いに耳目を集めていたエッジワース氏の「職業教育」に関する著作〔『職業教育論』〕の書評で、コプルストン博士がすでに急いで考察したと同じ問題をじっくりと注意深く調べ、うわべはエッジワース氏に取り組んでいると見せかけながら、その実、エッジワース氏の著作に世人を注目させた北国の批評家に（彼らのいずれよりも遥かに偉大な著述家に）応えているのですが、この人はその昔エッジワース氏と同じ側に立って論陣を張ったのでした。

4

私が遠回しに触れた著述家とは、他でもないロックその人です。この高名な哲学者は『エディンバラ評論』の一派に先んじて、少年たちが学校で教えるを受ける普通の科目を（後年必要とされないという理由から）廃止することを主張しました。そこで、今世紀のロックの弟子たちが説いている言葉を引用する前に、私は彼らの師の文章を少々引き合いに出してみたいと思います。彼は「教育」論の中でこう述べています。「すぐれた資質をもった有能な人間が慣習や盲信によってこんなにも誤った方向に導かれているのは、驚くべきことです。理性に問うてみれば、理性はこう助言するでしょう。子供の頃は、将来大人になった時に、役立ちそうなものを身につけることに費やされ

るべきで、ガラクタを頭に詰め込むことに費やされるべきではありません。そうしたガラクタの大部分は、普通その後、生きている限り二度と再び思い出すこともありませんし、またその必要のないことも確かです。そして、そのガラクタのような知識が多くこびりついていけばいるほど、事態は悪化するのです。」

そしてまた、詩作について語るなかで、ロックはこう述べています。「私に分からないのは、息子が他の一切の職業、実務を侮ることを父親は望まないのに、どうしてその息子が詩人になることを望み得るのかという理由です。しかしながら、これが最悪の事態というわけではありません。というのは、その息子が詩人として成功し、ひとたび才人の評判を得るならば、どんな仲間とどんな場所で時を過ごすことになるかのみならず、財産をも浪費することになるか、そのことを考えてみて頂きたいと思うからです。というのは、バルナソス山に金銀の鉱床を発見する人などほとんどいないからです。そこは空気は心地よいが、土地は不毛なのです。」

別の一節で彼は教育における功利性を、生徒の将来の職業との関係にはっきりと限定しています。つまり、彼は知性をそれ自体として教育するという考えを退けるのです。彼はこう問うています。「息子に商売をさせるつもりが、ローマ人の言葉を学ばせるために、自分の金と息子の時間を浪費すること、これ以上に馬鹿げた話が他にありませんか。しかも、その父親はといえば、自分の商売でラテン語を用いることはありませんので、学校で習い覚えた少しばかりのラテン語など必ずといっていいくらい忘れてしまっておりますし、またラテン語によって自分が受けたひどい仕打ちのために十中八九、それを嫌悪しています。子供が辿るであろう人生行路において決して用いることのない言語の基礎を無理に習わせて、どんな境遇にあっても大いに役立ち、ほとんどどんな商売においても必要不可欠な、字を上手に書くことや計算をすることを、その間ずっと疎かにするなどということは、その実例が私たちの周囲の至るところに見られなければ、どうして信じられるでしょうか。」もちろん、教育において子供の将来の職業に必要な事柄をないがしろにすることほど、馬鹿げたことはありません。しかし、ロックの語調には明らかにこれ以上のことが暗示されていて、精神の陶冶一般に資する教育が非難されています。

ここで現代における彼の信奉者たちに目を転じてみましょう。私がお話した改革においては「古典」研究がオクスフォード大学の教育の基礎を為していましたが、『エディンバラ評論』の一派はロックに倣って、「功利性」という原理に基づかない制度からは何の利益も生じて来ないと主張しました。

彼らはこう述べています。「『古典文学』はオクスフォードの大きな目的である。多くの人々がその研究に従事し、幾多の著作と大いなる名声をその部門にもたらしてきた。だが、もし人間生活に役立つすべての教養科目と専門科目リベラル・アーツが教えられていたならば、もしある者は化学に、ある者は数学に、そしてある者は経験哲学に専念していたならば、そしてもしすべての学問の成果がその難し

さと**功利性**との混合比で評価されていたならば、『大学』という組織はさらに一層価値のあるものになっていたであろうが、その輝かしい名声は幾分劣っていたであろう。」〔エッジワース著『職業教育論』に対するスミスの書評〕

「功利性」は確かに二つの点で教育の目的となり得ましょう。つまり、教育を受ける個人に関して、そして社会全般に関してです。これらエディンバラの著述家たちは、どちらの観点からそう考えているのでしょうか？後者の観点からです。ここまでは彼らはロックと意見を異にしています。と申しますのは、彼らは学問の進歩こそ「大学」の至上の、そして真の目的であると考えからです。このことは次の文章で検討されています。

『『大学』が久しく**役に立たぬ**ことを行なっていれば、**役に立つ**ということは最初は、品位を落とすことのように思われるものである。『経済学』の『講義』はオクスフォードでは反対されるであろうし、おそらく見くびられ、許可されないであろう。共有地の囲い込みを論じ、輸出入について長々と論じること、日常生活に接近しすぎることは、威厳にかかわる卑しむべきことのように思えるであろう。同様に、当代におけるパーとかベントリーの如き学者は、『大学』内で中性塩の発見者と同列に扱われたりしたら、憤慨するであろう。しかしながら、**知的労働の尊厳を測るのに、有用性以外のどんな尺度**であろうか？そしてまた、『大学』という言葉は、リベラルであると同時に、人類の役に立つあらゆる学問を教える所という以外の何を意味するというのだろうか？あらゆる人知を正しく評価するに際して、**絶えず変わることなく功利性に訴え続ける**ことほど、古典文学を然るべき範囲内に止めておくのに資するものはないであろう。…常に**指針として真の功利性を目指して**、我々は、学究的な、探究心旺盛な人物が、自然が創り出したものを分類し、身体の特質を調べ、学術用語の難解さに精通することができるように、喜んで配慮しなければならない。その人物が化学者であろうが、博物学者であろうが、あるいは古典学者であろうが、そんなことを気にかけてはならない。何故なら、趣味が満たされ、想像力が燃え立たされるように、事の本質を調べ、それを**人間の役に立つようにする必要がある**ということ、我々は知っているからである。」

さて、以上が言葉が意味する限りでの「教育」上の「功利」論の宣言ですが、功利主義的教育論そのもののためにも、それを唱道する有能な人たちのためにも、この宣言は私がここで表明している原理に立脚する人々の注目に値します。確かに、有用なもの以外は追求に値するものは一つもなく、人生はいかに興味深く、もの珍しく、すばらしくとも、些事にかまけていられるほど長くはないという主張も、いかにもごもつともです。否、ごもつともどころか、ある意味で、それは真実なのです。しかし、だとしたら、私はいかにしてその異議に真っ向から応えればよいのでしょうか？皆さん、実は私はすでにそれに応えていたのです。つまり、知性の修養はそれ自体の目的であると主張した時にです。何故なら、それ自体のうちに**目的**を有するものは、それ自体のうちにその**効用**をも持っているからです。私はこう申し上げたい。「**人文・^{リベラル}教養教育**」が知性の修養にあるとすれば、

そしてそれが一つの利益であるならば、これ以上先に進まなくとも、ここにこそ、ロックの質問に対する回答がある、と。というのも、健康な肉体がそれ自体一つの利益であるとするれば、健康な知性がそうでないという法はないからです。そして、「医科大学」が肉体の健康を目論むという理由から有用な機関であるとするれば、^{アカデミック}人文系学問の組織が人間性のなかの知性の面に力と美と把握力とを授けることにのみもっぱら携わっているからとあって、それがそうでない理由はありません。ところで、私が引き合いに出している『評論』誌の一派は、当を得た箇所、つまり、事実その妥当性の問題はさておき、原則において健全で真実である文章では、この点を認めているように思われま
す。彼らはこう述べています。

「古典教育の現状は、余りにも**想像力**を修養し過ぎて、それ以外の**精神の習性**をなおざりにし過ぎてしまい、多くの若者を自然が賦与した才能に全くふさわしからぬ上品な無能者といった型に仕立て上げてしまっている。…実態はというと、二十三、四歳の古典専攻の学生なら、先ず何よりも創造力豊かな作品に精通している。その感受性は鋭く、^{ファンシー}審美眼は生き生きとしており、趣味は優れている。しかるに、**思索**とか**独創的な研究**といった才能を彼は全く持っていないし、**ものごとをその第一原理にまで突き詰めたり**、論究の素材として無味乾燥な、おもしろくもない事実を集めるといった、かけがえのない**習慣**を身につけてもいない。彼の**知力**の堅固で男性的な要素はすべて、全くといっていいくらい、**修養**されぬまま放置されている。彼は思索の苦痛を嫌い、彼に自分の意見を弁護し自分の主張を証明するよう求める、大胆で独創的な人間をすべて疑ってかかるのである。」

5

ところで、私は今、なにも古典教育という特定の問題に関わっているわけではありません。でなければ、アリストテレスやトウキュディデス、タキトゥスの研究を含み、「古典学」や「古代学」まで巻き込んでしまう知性の修練を**想像的**と呼ぶことの当否を筋道を立てて問うことになるでしょう。けれども、「知力」とか「思索や独創的研究の才能」の練磨、「ものごとをその第一原理にまで突き詰める習慣」を練磨することが**優れた、リベラルな教育**の主要部を成すという所までは、私も直ちに認めます。ですから、『評論』誌一派の人たちが前述の文章から推して、その種の練磨を**有用な教育**の特徴であると考えれば、彼らが「有用（な）」という語で意味することは、まさに私が「利益」とか「リベラル（な）」という語で意味するものということになってしまいますし、ロックの問いかけも言葉上の問題になってしまいます。若者たちにラテン語や詩作を教えるべきか否かは、これらの勉学が精神の修養に資するか否かという**事実**にかかってくると思いますが、しかしこの問題にどう決着がつこうとも、その精神の修養にこそ私がリベラルないし**非職業的**^{ノン・プロフェッショナル}教育と呼ぶものがあり、『エディンバラ評論』の人々が有用な教育と呼ぶものがあるのだということまでは明らか

かです。

これが私たちの「教育」計画に「功利性」を強く要求している人々に対する明白な回答ですが、私はこの問題をここで放置するつもりはありません。もう少し広い視野に立ってこの問題を検討してみるつもりです。ロックのように、「有用(な)」という言葉はその本来の、一般的な意味に解してみましよう。そうすれば、私たちは一つの広大な思想領域に分け入ることになり、とても一回の「講演」でそれを正当に評価することなどできなくなってしまいます。もっとも、今日の講演では与えられるだけの時間をすべてそれに割いてはおりますが。私が申しますのは、「有用な」という語が単に役に立つものではなく、善に資するもの、すなわち善の媒介となるものを意味すると解してみようではないか、ということです。そしてこの意味においても、皆さんに、私はリベラルな教育が職業的教育とは言わぬまでも、真に十分に有用な教育でもある仕組みを説明するつもりです。確かに、「善い」が意味するものと「有用な」が意味するものは同じではありませんが、しかし私は、(有用なもの必ずしも善きものとは限りませんが) 善は常に有用であるということの一つの普遍的な真理として主張しますし、そのことが多くの懸念を取り除いてくれるはずで、善はただ単に善いばかりではなく、善を再生するのです。これが善の特性の一つです。それ自体のために卓越し、美しく、完璧で、望ましいものなど一つもありませんが、善はあふれ出て、あたり一面にそれ自身に酷似したものを撒き散らすのです。善なるものは多くの実を結びます。眼に心地よいばかりでなく、趣味にも適います。善は私たちを魅了するばかりでなく、自らを伝えるのです。善は最初私たちの称賛と愛を、さらに願望と感謝を呼びさすのですが、それは個々の場合に、善がどれくらい強烈で充滿しているかに比例します。大いなる善は大いなる善を授けるのです。ですから、もし私たちの誰かが極めて卓越した知性を有していて、それを実に見事に練磨し得たとすれば、その知性はそれ自体美しく、完璧で、称賛に値し、気高いばかりか、真の、高次の意味において、その所有者にとっても、その周りにいるすべての人々にとっても有用であるに違いありません。低次の、機械的な、商業的な意味において有用だというのではなく、先ずその所有者にとって、次に所有者を通して世間に広まる善として、祝福として、賜物として、力として、宝として有用なのです。このような次第で、もしリベラルな教育が善であるとするならば、それは必然的に有用でもあるにちがない、そう私は申し上げたいのです。

6

身体の健康と比較すれば、私の意味するところが、皆さんにもお分かりいただけるかと思えます。健康は、たとえそこから何も生じなくとも、それ自体一つの善であり、特に追求し慈しむ価値のあるものです。それでもなお、結局、健康の結果として生じる恵みとは健康に極めて近く、健康に跳ね返ってきて、それを取り囲むものであって、その恵みがあまりに大きく私たちとしては健康

が善であると同時に有用でもあるとしか考えられません。それが存在すること、そしてまたその働きのゆえに、私たちは健康を賛美し尊ぶのです。にもかかわらず、健康がもたらすと言い得るような明確な、紛れもない成果とか所産といったものを指摘することはできません。したがって、知性の修養について申し上げるならば、知性の修養がそれ自体で一つの善であり、それ自体の目的であると主張したからといって、「教育」の目的としてこの広義の功利性を否定する気は、私には毛頭ありません。まさに事の本質から言えば、私は知性の修養という観念から、それがなくては適わぬものを締め出すようなことは致しません。私はただ、知性の修養を有用であると言ういかなる権利もまだ持っていないのに、何らかの技術、家業、職業、商売、仕事が知性の修養の結果であり、その真の、完全な目的であると指摘できるということを否定するだけです。ここでも先程の身体との比較が符合します。身体が、適度のものであれ過度のものであれ、手仕事その他の労役の犠牲とされ得るように、知性も何か特定の職業に捧げられることもあり得ます。そして、私はこれを知性の修養とは呼ばないのです。さらに、身体の一部すなわち一器官が過度に用いられ発達することがあるように、記憶力とか想像力とか論理的思考能力もそうなり得るものですが、これもまた知性の修養ではありません。一方、身体が身体全体の健康だけを目的に配慮され、育まれ、訓練され得るように、知性もまたその完全な状態を目指して全体的に訓練されることがあって、これこそが知性の練磨なのです。

さらにまた、健康が肉体労働に先行すべきであり、健康な人が不健康な人の出来ないことを為し得、こうした健康の特性が体力、精力、敏捷さ、優美な身のこなしや動作、手先の器用さ、疲労に対する耐久性であるように、精神の全般的修養は同様に、職業的、科学的研究にとって最良の助けとなるのであり、教育のある人は無学な人たちの出来ないことが出来るのです。思索し論究し比較し識別し分析することを学んだ人、趣味を洗練し、判断力を養い、精神的洞察力を研ぎ澄ました人が、実際直ちに法律家とか弁護士、雄弁家や政治家、内科医、よい地主、実業家、兵士、技術者、化学者、地質学者、あるいは古物研究家になれるわけではありませんが、そうした人は私が引き合いに出した学問や職業のうちのいずれか一つ、あるいは何であれ、自分の趣味や特殊な才能に合ったその他の学問や職業に（他の人が聞いたことのないようなものでも）、気軽に、優雅に、手際よく、そして首尾よく従事することが出来る、そういう知性の状態に置かれているでしょう。ですから、この意味で（私は今までのところこの大問題に関してごくわずかしか述べていませんが）、精神の修養は断固として有用なのです。

さて、皆さん、「職業的」ないし「科学的」知識が「大学教育」の十分な目的たり得るとする考えに、私が反対意見を述べ、今後も反対し続けるとしても、私が特定の研究分野や学芸あるいは職業に対して、そしてまた、それらに携わっている人々に対して敬意を表していないなどお考えにならないで下さい。「法律学」や「医学」は「大学」課程の目的にあらずと申しましても、私はな

にも「大学」が「法律学」や「医学」を教える場に~~あらず~~などと言うつもりはありません。何か特定のことを教えないとしたら、「大学」は一体何を教えることができるのでしょうか？「大学」は知識のあらゆる部門を教えることによって、あらゆる知識を教えるのであって、それ以外の方法ではありません。私はただ、「法律学」とか「医学」、「地質学」とか「経済学」の「教授」には、「大学」の内と外とではこの違いがあるだろうと申し上げているだけです。つまり、その人は、「大学」の外で、自分の研究に心を奪われ、心を狭められて、法律家、内科医、地質学者、経済学者の「講義」を一歩も出ない「講義」を行なう危険があるということなのです。一方、その人は「大学」内では、自分と自分の学問分野が位置する所を正しく認識しているでしょうし、いわば高みからそこに降り来たったのであり、あらゆる知識を見渡しており、他の研究分野との競争があるからこそ行き過ぎを慎み、それら諸々の研究分野から格別の精神の啓発と寛大さ、自由と落ち着きとを手に入れ、その結果、自らの研究を一つの哲学とか臨機応変の才でもって処理するのですが、それはその研究自体からではなくて、その人が受けたりべらるな教育の属性なのです。

だとしたら、ここにその誤見を正す方法があります。何故なら（私は誤見と呼びましたが）、その誤見によって、ロックと彼の信奉者たちは世俗の職業とか機械的な技術とか物質界の秘密を教えない教育など何の役にも立たないという馬鹿げた考えのもとに、私たちを脅かし、知性の練磨から遠ざけてしまうからです。練磨された知性はそれ自体で一つの善ですので、それが取り組むあらゆる仕事や職業に力と恩恵をもたらし、私たちをより有益にし、優勢にする、こう私は申しているのです。私たちには人間として、人間社会に負っている義務があります。また、属する国家に、活動する領域に、様々な形で関わっている個々人に、そして生涯において次々と出会う人々に対して義務を負っています。そして、「大学」本来の目的である、かの哲学的ないし人文・教養教育（そう私は呼んでまいりました）は、職業的な利益に最優先権を与えることを拒むとしても、市民を作り上げるためにその種の関心事を後回しにしたにすぎないのであって、博愛というより大きな利益の促進に寄与すると同時に、（一見したところ、見くびっているかにみえる）外でもない個人の目的を首尾よく遂行する準備をしているともいえるのです。

7

さて、皆さん、ここですでに言及し、私が多くを負っている著作〔コプルストン『エディンバラ評論の誹謗に対する返答』〕から幾つかの文章を抜粋して、これまで申し上げてきた論点を詳細にわたって補強することをお許し願いたいと存じます。

コプルストン博士はこう述べています。「職業の分割と労働の分業が、あらゆる技術の熟達に、国家の繁栄に、そして社会の全般的安逸と幸福に資するということは、『経済学』においては議論の余地なき大前提である。この分業の原理が執拗に追求され、ついには初めてそれに接する者に驚

きの念を惹き起こすことさえある。この原理の適用範囲は不明であるが、各人の諸能力が一つの仕事に集中されればされるほど、熟練の度合いと速さが増すのは当然である。けれども、こうして国家の富の蓄積に貢献すればするほど、その人自身は理性的存在として墮落する一方である。活動範囲が狭まるに比例して、人の精神的な能力と習性は収縮し、人は強力な機械の付属品のようなものと化してしまい、その所定の場所においては役立つが、そこを離れてしまえば何の意味も価値もないものになってしまうのである。社会の様々な義務が首尾よく果たされるためには、社会が多くの部分やさらにそれを構成する下位区分に分割される必要があるとしても（それは疑いもなく必要なことである）、私たちはこうした制度が導くがまま、全面的にもっぱらわが身を任せることのないよう気をつけなければならない。私たちはこの制度の弊害を注視せねばならぬし、その主力を抑制し、均衡を保つのに役立つような他の原理を働かせることによって、その制度を修正し規制すべきである。」

「すべての学芸が、その教授を単一の研究に閉じ込めることによって向上するということは、疑いの余地がない。しかし、学芸自体は、このように人間の精神をその研究に役立つように集中させることによって進歩するとしても、その学芸に閉じ込められた個々の人間は衰えていくばかりである。社会の利益は個人の利益にほとんど反比例する。」

「社会自体は、個々人からその職業上の特定の義務以外に、何か他の貢献を求めるものである。そして、もしそのような自由な交わりが全く確立されていなければ、狭量な見解やけちな利害関係に没頭したり、自分が関わりを持たない事柄すべての重要性を過小評価したり、自分たちの偏った意見をそれが当てはまらない事例に持ち込んだり、要するに、ちょうど数多くの何のつながりもない構成単位が互いに取って代わり反駁し合っているような振る舞いをしてしまうものであるが、こうしたことは人間性に共通の欠点である。」

「文学を修めることの中にも、あの共通の絆——上流及び中流社会の中で競合し合う派閥や下部組織を一つの関心事に結びつけ、共通の話題を提供し、すべての職業が多かれ少なかれ染まっている狭量な偏見と結びつかない共通の感情を燃え立たせる共通の絆——が見出される。こうして獲得された知識もまた、精神を拡張、拡大し、その能力を刺激し、四肢と筋肉とを呼び起こして、自由に働かせるのである。それは一つの方向に絶えず行使しすぎると狭量な態度を身につけるのみならず、その本来の働きと活力とを幾分失ってしまう傾向がある。したがって、知識は生計のために職に就く資格を人に直接与えるのではなく、すべての人を豊かにし気高くするのである。それは、ある特定の職業や天職に特有の職務を教えることはないが、どんな職業に就いても人をしてより優雅に、より高雅な態度をもって自分の本分を尽くさしめるのである。それは、適切に計画され処理されるならば、人間が『公私両面にわたって、平和時にあっても戦時下にあっても、あらゆる職務を公正に、巧みに、そして高潔に遂行』^(原注2)できるようにする、あの完全にして、寛大なる教育の主

要素なのである。」

8

これらの抜粋中で唱道されている「人文・教養教育」観は、すでに言及した「論文」中でデイヴィスン氏によって敷衍されています。氏は論争中「人文・教養教育」の「有用性」により重点を置き、先達よりもその言葉を広く解釈しています。個人にとっての知識の「効用」が、公共にとっての「効用」と異なり、反比例の関係にあるということを論ずるかわりに、氏はコプルストン博士の先程の文章に暗示されていることに専心するのです。彼は次のことを明らかにしています。先ず、「人文・教養教育」は「功利性」の尺度をもってしても、一般に「有用な教育」と呼ばれているものよりもはるかに優れているということ、そして次に、通例「有用な」という称号を独占している「職業教育」の目的としてさえも、それが必要であり有用であるということ、をです。ある所で彼はこれら二つの命題のうち前者を推奨していますが、次の一節はそこ〔エッジワース著『職業教育論』の書評〕からの抜粋です。

彼はこう述べています。「より自由で、拡大した精神の陶冶ということを幾分軽視し除外して、いかにすれば自分の領域におけるより優れた技能を育てることができるかなどと大いに思い煩うことは、すなわち極めて狭量な人生観を抱くことである。彼（エッジワース氏）の方式では、すべての獲得した学識の価値は職業への貢献度によって測られることになっている。その職業に特有の義務は自由で独立した趣味と徳を犠牲にして称揚されるのだが、実はこの趣味や徳こそが社会の一般的関係を維持し、その中にいる個人を高める役目を果たすのである。要するに、人間が職業に侵害されてしまうのであり、頭からつま先までお仕着せを着せられてしまうのである。その人の徳、学問、思想は正服ないし制服ガウンを着せられてしまい、全人格は専門の特性という厳密な鑄型の中で形成され、押し固められ硬直させられてしまうのである。出しゃばりなたしなみとか、公共の利益とは考えられない能力といったものは、仮に誰かがいやしくもそれに熱中することがあるとして、より役に立つ特権的な美点という外套に隠れて忍び歩かねばならない。この方式のもつ精神と全般的傾向とが私たちを導いていく完成の状態とは、かようなものである。」

「しかし、職業的性格のみが、職業に従事する人間が支持すべき唯一のものではない。人は始終職務についているわけではない。人が尽くすべき数々の奉仕義務があり、それは教会や法廷に対するものでも、軍事的なものでもないし、市民制度上のそうした呼び名で表わすことはできないが、にもかかわらず、このような権威的な称号を持つものに決して劣るものではない。その本質的な価値においても、道徳的な意味合いにおいても、社会に与える印象においても少しも劣るところはないのだ。友として、仲間として、広く市民として、家庭生活の諸々の関係の中で、余暇の活用と飾りたてにおいて、人は活動範囲を有している。そしてその活動範囲は、そのように言いたければ、

職業の範囲内に広がっているが、決してそれと衝突することはない。その職域内で優れた理解力という強みを何ら発揮することができなければ、他の領域でどんなに優れた技量なり熟達ぶりを示そうとも、人は無教育な人間と何ら変わらなくなってしまう。」

「いやしくも洗練された国民ならば、大いに実践しているある種の能力がある。それは明確な学問として学校、大学で教えられているわけではない。とはいえ、学校で教えられることが、それと何らかの関係を持たされるべきことは当然である。それはまた決して世間から与えられるものでもない。すべての人が自分自身のために自分で行使する義務を負っていて、人は能力の及ぶ限りそれを行行使する。しかし、その行使の仕方ほど、甚だしい相違が現われるものは他にない。我々が奨励しているまさにこの能力が単に、料金もかからねば報酬もなく、日常生活で英語で良識あることをしゃべる能力に過ぎないといえば、職業的学識を唱道する人々にはにんまりとするだろう。我々がそれを少しでも強調したりすれば、彼らは冷笑を浮かべるであろうが、しかし実際は、それは彼らが考えているほど些細な問題ではないのである。野蛮人の小屋を覗き込んでみるがよい。そうすれば、聞くものとしてなき彼らの愚かな沈黙の時間を満たしている、荒涼たる空白が見えてくるであろう。戦さや狩猟といった本業が終わってしまい、彼らにはもう何もすることがなく、言うべきことも何もないのである。進歩向上した生活に目を転じれば、あらゆる形式の会話がむなしい慰み以上の何ものかを伝える手段となっている。実際それは、すべての人々の意見、趣味、感情を広め、形成する極めて活発な媒介である。会話それ自体が目すべき事柄になるのである。その話題はきわめて雑多であり、いかなる特定分野にも属さないものばかりである。その力と影響に関していえば、話し方は人間がじかに接する社会に対して、振る舞い方と全く同じ意義を持つとってよかろう。ところで、まともな会話に加わる人々のうち、単に自分の学芸についてのみ熟達しただけの人は、例外なく最悪と考えられている。このような人物の社交時の内容の貧弱さ、学ぶべき点の乏しいことはよく知られている。あるいは、たとえ退屈さを免れているとしても、それは時をわきまえない学問上のおしゃべりを始めるからにすぎないのである。我々は彼の講演や演説を聴きたいわけでもないし、彼の方とて他に与えるものは何も持っていないのである。長椅子に座っている間はなかなか威勢がいいが、肘掛け椅子に腰かけると全くの別人になってしまうというわけだ。他方、最良の話し相手は、職業上の的確さと研究心に多種多様な学識についての自由自在な、取り留めもない知識をつなぎ合わせ、そうすることで全般的な観察という精神に感化されるようになった人だと言っていいだろう。」

9

彼、デイヴィスン氏はこのように人文・教養教育が、その教育を受けた者が社会の成員として、人生における様々な義務や状況や出来事に出会った時に、真の助けとなることを明らかにし、次に

そこから当然期待される直接的な効用に加えて、それが職業上の活動に関連し、かつまた「職業教育」が目的とするような特殊な機能を果たし、特殊な利点を追求する上でも実際に役立つということを通じて明らかにしています。

彼はこう述べています。「ある人が一つの職業を生業とすれば、卓越へと至る本道を歩いていることになるだろうし、注意力を分散させれば、多くの職業に就いても卓越した才能を発揮することはほとんどないということは認めよう。しかし、これ以上同意することはできない。何故なら、人を何か一つの職業に卓越させようとする道（それだけが今問題となっている点である）は、その職業の要件をあからさまに引き合いに出すことによって、その人の初期の勉学を拘束し、その精神の最初の成長を束縛することだと考えるのはこれとは全然異なる問題であり、思うに、それは容認すべからざる、論破されて然るべき考えだからである。おそらく少数の抽象的で孤立した学問は、こういう風にして取り掛かるべきかもしれないが、このような例外とするべきものは極めて少なく、列挙する必要もない。しかし、職業的及び実用的能力を獲得するには、そのような原理は命取りである。この能力に必要とされる主要な要素は必須の知識と練磨された知力であって、しかもこの二つのうち後者がはるかに重要である。十分に発達した知力の持ち主は、他者の知識を自在に駆使する能力を持っている。そのような能力のない者は自分自身の知識すら思い通りにできないのである。」

「知的な能力のなかでは、判断力が人生において最も優位に立つ。判断力にそれが持つべき二つの習性、正確さと力強さをいかにしてつけるかが問題である。これらの特性がすべての人の、あるいはどのような人の理解力にも確実に授けられるという判で押したような方法をほのめかすことなど、ものを知らない思い込みというものであろう。しかしながら、こう言っても差しつかえないであろう。それらは「^{シンプル}葉草採集者」[サミュエル・バトラーの風刺詩「ヒューディブラス」三・三・八二三]には得られぬもので、先ず極めて幅広い読書と修練、そしてその後の観察から引き出された、多くの異なる事柄の^{エッセンス}精髓と^{エキス}抽出物を結合させることから得られるものだ、と。というのは、もしこの点について何か一つ明瞭なことがあるとしたら、それはある一つの主題についてしか、一つの主題だけを求めて思考するよう訓練されてきた人は、その一事すらうまく判断し得ないだろうからである。一方、自分の思索の輪を広げようとする人は、急速な割合で知識と能力を増していくのである。思想もまた、孤立した単位としてではなく、分類と組み合わせとによって作用するのであり、精神という同一の機能の適切な範囲内にちゃんとおさまっているものはみな、明らかに互いにかみ合い支え合っているのである。判断力はいわば比較と識別によって息づいているのである。判断力を最初に訓練する時、多くの事柄について広範囲に行なえば、これらの事柄が寄せ集まって、判断能力に役立つようになるということに疑うことができるだろうか？」

「この問題をもう少し掘り下げるために、判断力が何を意味するかを定義し、しかる後、一体い

かなる類の勉学のなかにその判断力の進歩向上があるかを確かめてみよう。」

「判断力とはここでは、財産や世間体を損なうような間違いを犯さないように守ってくれるような、知性のある種気取りのない、有用な性質といったものを表わすのではなく、実務、学識及び才能のあの主要原理を指し、何事によらず人が選択した問題に取り組もうとする時、力を与え、その**要点をつかむ**ことを可能にしてくれるものである。この定義が形而上学的に正しかろうがそうでなかろうが、それは我々が探究している問題の本質を深く衝いている。それは職業上、あるいはそれ以外の場で行動する時に、誰しものが所有したいと望む力の特徴であり、考え得る最良の陶冶された精神と符合する。」

「次に判断力に何がしか役に立つためには、その機能が認識し得る（範囲内に入って来る）諸問題に精神を働かせなければならないし、判断力が認識し得るように何か現実的な訓練を施さねばならないことは否定できない。ここに学問の異なった諸部分を我々の目的に沿って分類する選択の法則がある。判断力の領域に属するものには、宗教（天恵の証しと解釈とにおいて）、倫理、歴史、雄弁術、詩、一般的思索の理論、美術、^{ウィット}知力の作品がある。これら学問の諸部門は極めて多様に思われるかもしれないが、それらはすべて関係の二大原則によって結ばれているのである。先ず第一に、それらはみな人間の道徳的、社会的、感情的本性という同一の大問題から捜し出される。そして第二に、それらはすべて（多かれ少なかれ厳格な）道徳的理性という同一の力の支配下にある。」

彼は続けてこう述べています。「もしこれらの学問が判断の機能に直接働きかけ、それを行使させるようなものであったとしたら、その学問は、職業なり他の用途に向けられていようがまいが、活発で独創的な力を育て上げる教育の真の基礎となるのである。歴史、雄弁術、詩、倫理等々を寄せ集めてみても種々雑多な印象しか与えないかもしれないが、混ぜ合わされると、それらは皆で力を合わせて一つの結果を生み出すのである。それらは互いを説明し解釈するために互いになくならないものである。それらのすべてから得られた知識は融合し、それらの学問に次々と精通し熟達した精神の習性は一緒になって、ただ一つの学問に専念することによって得られるよりも、はるかに豊かな思想性とより全般的で実際的な応用力を生み出すのである。ちょうど種々の金属を溶解して作るコリント青銅が、芸術家にとって最も引き伸ばしやすい完全な素材であるように。もしも一人の著述家、ベーコン卿が異なる学問の効用を簡潔に比較検討しているのを敢えて模倣するならば（実際は模倣しようとするよりも典拠と見なす方がはるかに無難な人物なのだが）、歴史が理解力に豊かさを与え、道徳哲学が力強さを、詩が崇高さを与えると言うべきであろう。実際こうしたものこそ学問本来の力であり性向でもあるのだが、かかる高遠な表現にふさわしい徳のいずれか一つでも学問から引き出し得るような感受性に富んだ精神の持ち主はほとんどいないのである。それ故、このような賛辞を、人はその多岐にわたる読書の過程からこれらの特質を少なくともある程度

注入され染み込まれないわけにはいかない、という言い方に甘んじて格下げしなければならない。ただ一つのことだけは疑いを入れる余地がない。つまり総括的な理性の諸要素は、いかなるものであれ一つの学問の中に十分に正確に表わされるものではないということ、そして、その学問特有の表現を知ろうとする者は、多くの書物の中にそれを読み取らなければならないということ、だけは。」

「もしも種々の学問が助けとして役立つならば、それらは互いに是正し合う上でなお一層有益なのである。というのは、それらの学問はそれぞれ独自の価値を持つように欠陥をも持っていて、一つの学問にいかにか該博な知識を持っていようとも、見かけ倒しで空疎な知性にすぎず、あるいは限られた読書もたらすその他の欠点が染みついた知性しか生み出し得ないからである。例えば、歴史は事物をあるがままに示す。つまり、人間の道徳や利害関係が激情や愚行や野心といったあらゆる不完全さによって損なわれ、歪められた姿のまま示されるのである。哲学は状況を裸にしすぎるくらいがあるし、詩はそれを余りにも飾り立てすぎる。この三つを集約した見方こそ、それぞれの誤った独特の色合いを是正し、真理を我々に示してくれる。真理の正しい捉え方は、それら三つの学問を一緒に学ぶことによって得られるはずである。このことをわが国が誇る不滅の政治家パーク氏（氏の雄弁はそれ以上に見事な彼の叡智に対して以外劣るものがなかった）に接した者は、誰でも知っているにちがいない。彼の雄々しい感情のうちには、それらの学問が一体となって貢献した思想と感情が表現されているからである。パーク氏のように磨かれ高められた精神が我々の師であってくれたならば、我々は彼のようにものごとをその根源にまで溯り、彼の作品ではなく方法を学ばねばならない。前者を学んだとしても我々は弱々しい模倣者にしかならないだろうが、後者を学べば、我々は何かしら自分自身の能力に到達することができるだろう。けれども、伝記がはっきりと断言しているように、彼も他のどんな有能な思想家であっても、何かはっきりと限定された将来の目的のために（これはエッジワース氏の言である）、学問のけちくさい一領域によって人格を形成されたのではなく、広範で自由な羅針盤リベラル・コンパスを手に精神を働かせることが、人をより理性的で聡明な人間にするという以外、何の目的も抱かずに数多くの主題について大いに思索を重ねることによってである。」

10

しかし、私はこの抜粋を切り上げなければなりません。本日、私は話題を絞って、かの知性の練磨（それが個人にとって最もよいことです）が、社会に対する義務を最もよく果たさせ得るのだということを申し上げてまいりました。確かに「哲学者」と俗人とでは、考え方そのものが異なっていますが、それぞれの人格が形成される方法はかなり似通っています。「哲学者」は思考に関わる諸問題を自在に操ることができますが、真の市民や紳士はそれと同じことを仕事や振る舞いに対し

て行ないます。ですから、実際的な目的が「大学」課程に割り当てられねばならぬとしたら、それは社会の良き^{メンバー}成員を養成することであると私は申し上げたい。その技術は社会生活の技術であり、その目的は世間への適合性です。「大学」は一方で特定の職業にその視野を限定しませんし、他方英雄を生み出したり、天才に靈感を与えたりもしません。確かに天才の作品はいかなる技術にも分類されませんし、英雄的精神はいかなる規則にも服しません。「大学」は詩人や不滅の作家、学校の創立者、植民地の指導者、諸民族の征服者の生誕地ではないのです。「大学」はアリストテレスやニュートン、ナポレオンやワシントン、ラファエロやシェイクスピアといった人物の誕生を約束しません。もっとも、このような驚異的な人間たちをこれまでその周辺に生み出してはきましたが。また一方、「大学」は批評家や実験主義者、経済学者や技師の育成に満足しているというわけでもありません（とはいえ、その領域内にこれらの人々もおりますが）。「大学」における訓練は、偉大ではありまするが平凡な目的を達成するための偉大で平凡な手段なのです。それが目指すところは社会の知的風潮の高揚、公共心の涵養、国民の趣味の純化であり、民衆の熱狂に真の原理を与え、民衆の向上心に確固たる目的を与え、時代の思潮を拡大し、それに節度を与え、政治力の行使を促進助長し、私生活における交際を洗練することです。それは人に自分の見解とか判断をはっきりと意識的に見つめさせ、それを発展させていくうちに真理を与え、それを表現する雄弁を、それを主張する力を与える教育なのです。それは人間にもものごとをあるがままの姿で見つめ、まっすぐに要点へと突き進み、思考のもつれをほどき、詭弁を看破し、見当違いなものを取り除くことを教えてくれるのです。それは人がどのような職に就こうとも、それを立派にこなし、どのような問題をも易々と克服するよう訓練します。それは他者に順応する法、他者の心理にわが身を置いてみる法、他者に自分の気持ちを伝える法、他者に影響を及ぼす法、他者と理解し合う法、他者に我慢する法を教えてください。このような教育を受けた人は、どんな社会にあっても気楽にくつろいでいられますし、あらゆる階級と共通の立場を有しているのです。その人は語るべき時と黙すべき時を知っています。話をする時も耳を傾けることもできます。何も伝えるべきものがない時には、要を得た質問をして時機を得た教訓を得ることができます。常に心構えはできていますが、決してひとの邪魔はしません。その人は愉快的な話し相手であり、頼もしい仲間です。彼はまじめになるべき時とふざけても構わない時をわきまえており、優雅にふざけ、有効にまじめになれる如才なさを有しています。世にありながら同時に独自の世界にもいる平静な心を彼は持っていますが、戸外へ出られない時には家の中に幸福の源を求めます。彼には公の生活において役立ち、隠退した時に自分を支えてくれる天賦の才能がありますが、それなくしては巨万の富も俗悪でしかなく、それあればこそ失敗も失望も魅力的になるのです。人がこうしたすべてのことを為すのに役立つ技術は、それが追求する目的の中にありますが、それは富の技術、あるいは健康の技術と同じくらい役に立つものです。とはいえ、その技術は体系化を容易に許さず、その結果も他より明白でも、確実でも完璧

でもありません。

(原注)

- 1) キーブル氏、ハーズリの^グ教会区^イ司祭、オリエル学寮元特別研究員、オクスフォード大学詩学教授。〔ジョン・キーブル（一七九二～一八六六年）、ニューマンと共にオクスフォード運動の中心人物〕
- 2) ミルトン『教育論』を参照。

本稿はジョン・ヘンリー・ニューマン『大学の理念』(*The Idea of a University*, Oxford: at the Clarendon Press, 1873; 1976) 第七講演「知識と職業的技能」(原題「職業的技能との関係からみた知識」)の全訳である。訳注は活字のポイントを落として本文中に入れた。